

■ 書 評



乳幼児精神医学入門

本城秀治 著
みすず書房 2011年9月
224頁, 定価 3,360円

名古屋大学精神科では1936年に堀要教授により児童治療教育相談室が開設され、我が国の児童精神医学の歴史が始まった。その流れは、若林慎一郎、大井正巳、本城秀治と続き、2008年4月に標榜科目としての「児童精神科」の承認に結実したのであるが、本書の著者、本城秀次氏は名古屋大学精神科の児童精神医学のグループでの研鑽を積んだ後に「他人のやらないことをやりたいとの性癖」から我が国における乳幼児精神医学のパイオニアとしてこの領域を開拓した人である。

乳幼児精神医学は胎生期から3歳ぐらまでの乳幼児を対象とするが、0歳児からではなく胎生期から始まるとの認識が重要である。「乳幼児精神医学」の名称に含まれる乳幼児と精神医学には逆説的な意味合いが込められており、「乳幼児に関わることは必然的に母親や父親や家族に関わることを意味しており、精神医学という呼称にもかかわらず、小児科や臨床心理学、ソーシャルワーク、特殊教育、さらには発達心理学、精神生物学、家族研究などとの密接な連携が必要とされる」乳幼児精神医学は、多領域的・多世代的・発達指向的・予防指向的な特徴を有するという。

第1章から第4章までは総論部分であり、第1章「乳幼児精神医学の歴史と現状」で、乳幼児精神医学の歴史と特徴を紹介した後に、第2章「乳幼児期のいくつかの発達理論」、第3章「乳幼児の発達と母子関係」、第4章「精神発達と環境」が続く。マラーの「分離-個体化過程」理論、スターンの「自己感の発達」理論が紹介され、ボウルビイの「愛着概念」、エイズワースの「ストレンジ・シチュエーション」

検査法、乳幼児気質の検査法である Infant Temperament Questionnaire (ITQ)、Infant Characteristics Questionnaire (ICQ) について解説された後に、乳幼児の精神発達の生物学的知見が紹介されている。

第5章から第8章までが本書の中心部分であり、実際の診療に大いに役立つ部分である。第5章「乳幼児の診断」では、コールの診断分類体系、National Center for Infants, Toddlers, and Families による行動評価 (DC: 0-3) の多軸診断法が症例に即して解説されている。第6章「乳幼児の治療」では、フライバーグの Ghost in the nursery (キッチン精神療法)、クレイマーの母-乳幼児短期精神療法が症例を紹介しながら説明されている。第7章「母子支援」では、マタニティ・ブルーズや産褥うつ病への対応、NICUにおけるカンガルーケアなどが、乳幼児精神医学の主要な課題として述べられている。第8章「虐待について」では、児童虐待の歴史と現状、経過、治療法などを述べた後に、児童虐待の発生要因を子供・親・家族社会的要因に分けて解説し、児童虐待の世代間伝達についての考察が加えられている。第9章の「親と子供の診療科にいたるまで」は著者による臨床と研究活動の概要であり、このような活動を率いてきた著者の思いが、「乳幼児の精神医学的問題を取り扱う乳幼児精神医学では、乳幼児とそれを取り巻く環境との関係性の問題に目を向けていくことが治療の大きな手段となる。ここに乳幼児精神医学という専門領域に従事する面白さともどかしさがあるのではないだろうか」と締めくくられている。

本書を通読することにより、乳幼児精神医学の全体を理解するとともに、我が国の乳幼児精神医学の現状と問題点を理解することができた。誠に適切な入門書である。臨床現場にありながら、近年発展著しい精神生物学や精神薬理学の領域の知見を取り入れながら進んできた開拓者の努力が結実しており、著者の力量が伝わってくる。評者は、本書を読了した後に、多くの人に推薦したい、1人でも多くの人に読んでほしいという素直な読後感を味わった。本書には決して宣伝めいたことは一言も書かれていないが、1人でも2人でも乳幼児精神医学を志す人を増やすことに役立ちたいとの著者の思いが伝わってくる良書である。この書評をまとめると共に、これからの我が国乳幼児精神医学の発展にエールを送りたい。

(武田雅俊)